



富士見市立東中学校

7月号

こ ち
東中だより 東風



『夢や希望をはぐくみ、一人一人が輝く学校』を目指して

巻頭言

校長 菅野 誠一

ふたつの不等式に

朝顔は、夏の記憶を呼び覚まします。早朝には花を開かせて、朝の始まりの大切さを伝えてくれた夏花でもあったことに気づきます。「♪新しい朝が来た 希望の朝だ♪」と、ラッパ型の口から『ラジオ体操の歌』が流れてきそうな朝顔を観察すると、絵心がかきたてられ、胸奥にしまった絵日記を取り出します。炎暑で炙り出されたかのような「言葉は浅く 意(こころ)は深く」の熱い言葉が表紙に見え出し、絵日記を味わう心得とします。絵日記を開いた瞬間、多色で描かれた「絵」が、“飛び出す絵本”みたいに立体的にせり出して、過ぎし日の夏の一瞬を再現するほどです。単色で書かれた「文」が、艶やかな黒光りで思い出の名場面を眩しく解説しつつ…。 “文月(ふみづき)”とも呼ばれる7月、『多くの言葉で少しを語るのではなく、少しの言葉で多くを語りなさい。』というピタゴラスが残した言葉の重みが、絵日記文の短さに重み付けします。そして、幼気な「絵」が、クレヨンや色鉛筆の香りがする“スクリーンショット”となって、「絵」の登場人物の胸奥へ“一斉送信”され、大切に保存され続けていることを思います。

さて、学期末を迎え、試験や成績といった話題に、『ノーベル賞』の名前が由来する発明家アルフレッド・ノーベルの少年時代の話を思い起こします。当時、ノーベルの成績は常に二番で、一番は常にボギーという少年でした。ところが、ある日から、ボギーは、病気で長期欠席となりました。その後、ボギーは、病気が治って再び登校できましたが、次の成績順位も、ボギーが一番で、ノーベルは二番でした。実は、ノーベルは、学校で習った内容を毎日ノートにまとめて、欠席していたボギーに毎日届けていたのでした。この話に、ノーベルが、優秀なだけではなく、優しさに秀でた少年でもあったことを強く感じ取ります。もし、ボギーが今も生きていたら、こう語るのかもしれませんが。「ノーベルが、毎日訪れてくれて、闘病中の自分に毎日教えてくれた不等式があります。『人と競い合う勉強 < 人と高め合う勉強』という式です。」ふと、もうひとつの不等式が頭に浮かんできます。『人と比べた成績 < 過去の自分と比べた成績』という式が…。

優れている人が皆 優しいとは限らないが 優しい人は皆 人として優れている